

令和 3 年度
横浜市立高等学校
自己評価書

横浜市立
横浜サイエンスフロンティア高等学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・理数科

2 学校長 永瀬 哲 (令和4年4月1日現在 在職4年目)

3 学校教育目標

- 1 広い視野、高い視点、多面的な見方を身につけさせ、ものごとに対する柔軟な思考力・解析力を培い、論理的頭脳を養う。
- 2 旺盛な探究力、豊かな創造力、世界に通じるコミュニケーション能力、自立力を培うことによって、よりよく生きる知恵を養う。
- 3 社会における己の使命を自覚し、積極的に社会に貢献しようとする志を養う。
- 4 人格を陶冶し、有為な社会の形成者としての品格を養う。
- 5 幅広い知識と教養を身につけ、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな心身を養う。

4 教育方針

驚きと感動による知の探究

《教育理念》

学問を広く深く学ぼうとする精神と態度を培いながら、生徒一人ひとりが持つ潜在的な独創性を引き出し、日本の将来を支える論理的な思考力と鋭敏な感性をはぐくみ、先端的な科学の知識・技術、技能を活用して、世界で幅広く活躍する人間を育成する。

5 教職員数 (令和3年12月1日現在)

学校長 1 校長代理 0 副校長 2 事務長 1
教諭 75 (男 50、女 25) 養護教諭 2
実習助手 1 事務職員 4 技能職員 0
A E T 2 非常勤講師 8 管理員 0

6 生徒在籍数 (令和3年12月1日現在)

年次(学年)	学級数	男子	女子	合計
1	6	168	70	238
2	6	162	69	231
3	6	177	53	230
4	0	0	0	0
合計	18	507	192	699

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		85	85	100 %
生徒	1年	238	232	97 %
	2年	231	224	97 %
	3年	230	211	92 %
	4年	0	0	0 %
	合計	699	667	95 %
保護者		699	663	95 %

8 自己評価実施日

教職員	令和3年12月1日～令和3年12月10日
生徒	令和3年12月1日～令和3年12月10日
保護者	令和3年11月1日～令和3年11月19日
地域	令和3年11月15日～令和4年1月13日

9 集計・分析期間

令和3年12月15日～令和4年2月9日

10 自己評価書の公表方法・時期

○集計結果は令和4年1月下旬、分析については、令和4年5月中旬以降
本校ホームページで公表の予定

<自己評価>

1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員 1, 2, 3, 9, 10, 13, 14 生徒 I-1, 6 保護者 I-1 II-1
経年変化 1, 2, 5, 10)

取 組	<ul style="list-style-type: none">▪ 本校の学校経営方針に基づき「先端科学技術の知識・智恵を活用して世界で幅広く活躍する人間」の育成を目指した教育活動を展開した。▪ 令和4年度より年次進行で実施される新学習指導要領を念頭におき、指導と評価の一体化を目指した教育課程編成に取り組んだ。▪ 第3期横浜市教育振興基本計画の「魅力ある高校教育の推進」にもある「市立高校におけるグローバル人材の育成」については、コロナ禍でありながらも、オンラインを活用し異文化コミュニケーションの促進に努めた。▪ SSH指定校（3期2年目）、SGHネットワーク指定校及び横浜市教育委員会進学指導重点校としての取組を行った。特にSSH重点枠の指定に向けて全教科で「コンピテンシースキル」をつけることを意識した教育活動を充実させた。▪ 中高一貫教育校として、中高の融合を意識した学校行事・教育課程の推進を行った。
-----	--

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 本校の学校経営方針をよく理解し、魅力ある高校教育の推進に向けて教育活動に取り組んでいる教職員はおよそ80%以上となっている。 （P1教職員アンケート1・2・3・14）年度当初に行っている開校記念講話や、日常的に学校経営方針に基づく取組がなされていることの成果となっている。 ▪ 現在の教育課程においても、生徒の興味や希望進路に応じて編成され、「先端科学の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人材の育成がされている」とおよそ80%以上の生徒・保護者が感じている。（P3生徒アンケート1、P7保護者アンケートI-1、P8保護者アンケートII-1） ▪ 現行教育課程の成果と課題を踏まえ、SSHとしてさらなる発展を意識した新学習指導要領実施に向けた取組を行うことができた。特にサイエンスリテラシーだけではなく、他の教科でも身につけたい力の見直しやクロスカリキュラムの策定など、教育活動全般を通し学習指導とその評価の方法を見直した。 ▪ 中高一貫企画推進会議や、中高合同教科会・研修会等を通して、中高の教職員が協働して、「育てたい生徒像」や「身につけさせたい力」の共有を図ることができた。経年変化を見ても、「教職員13、学校教育目標の実現に向け、全教職員が取り組んでいる。」「教職員14、学校経営方針に基づき、教職員が協力して円滑な学校経営がなされている。」の「十分に実現できている。」の数値が上がっており、中高それぞれの教員がイメージを言語化させる機会を多く持つことで、中高の融合が進んでいる。（経年変化・教職員P3 13・14）
<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 来年度より年次進行で行われる新学習指導要領における観点別評価についてシラバス作成などの作業を通して理解の促進を図ったが、全体で共通認識を持つ必要がある。 ▪ SSH重点枠指定を念頭に置き、それに対応できる教育課程に改善していく必要がある。 ▪ 開校当初からの教職員の異動の時期となり、今後本校の教育理念・学校経営方針を他校より異動してきた教職員や新採用の教職員にどのように継続していくかが課題となる。「魅力ある市立高校」として、本校が設置された経緯とその責務をよく理解し、生徒・保護者・市民の厚い期待に応えようとする人材の育成が求められている。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・SSHとしてさらなる発展を意識し新学習指導要領に対応した取組を行うため、特に本校のカリキュラムの中核であり、かつ魅力ある教育活動の一つである「サイエンスリテラシー」の充実を図る。附属中学校から進学した生徒の研究の継続性を担保するための「サイエンスラボ」を充実させることや、他の教科で身につけたい力の見直しやクロスカリキュラムの策定を進め、計画的かつ複合的に教育活動を行う意識をつける。 ・教育理念や学校経営方針を理解するだけでなく、それを活用していく組織の構築を図る。サイエンスグローバル事務局が中心となり、Ai-GROW を活用して身につけたい力を授業でどのように修得していくかの計画や、メンター研修・横浜型初任研等を通して学校経営に臨む意識の向上を図る。 ・中高一貫教育校として、中高一貫校研修やサイボウズでの情報連携、月1回の分掌会での緻密な情報共有などの場を設定し、中高教職員間の連携をさらに図っていく。
-----	---

2 教育活動の状況

□教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2, 3, 4, 5, 6, 18 生徒 I-1, 9 保護者 I-2)

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策において学習活動に遅れが生じないように時差登校やオンライン授業が円滑に進められるように教室割り等の手配や準備を行った。 ・9月は分散登校もあり、令和4年度の科目選択は例年より遅れて希望を取るようになったが、日程調整を行い、出来る限り生徒の希望に沿った科目選択が行えた。 ・新教育課程に伴う観点別評価の導入にあたり、評価規準及び評価方法について共通認識をもち、全ての教科で観点別評価をスムーズに行えるよう意思統一を図った。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標やその実現に関する項目である教職員 2, 3, 4, 5 に関しては80%強の肯定的評価を示しているが、評価や研究に関する項目の教職員 6, 18 では70%程度に留まっている。 ・進路実現のために必要な科目や、興味・関心を満たす科目が設定されているという項目に関して、生徒は90%、保護者は80%程度の肯定的な評価となった。

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度から観点別学習状況の評価を指導要録に記載することとされており、教科内かつ学校全体で共通認識が必要であり、研修会などを通じてより良い評価の在り方の検討が必要である。 ・感染症対策等に関して、迅速に対応できる体制作りが必要である。 ・保護者のアンケートのI-2「教育課程は、生徒の進路実現に適している」という項目をより肯定的な評価に高める方法を検討する必要がある。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度に新学習指導要領準拠の教科書が出揃い、新1年次では観点別評価が実施される。今後1年次の評価実務の反省を生かしながら新課程のシラバスに反映させるとともに、研修会を開催して事例研究による授業へのフィードバックを図り、より良い授業と評価を実現する。 ・これまでの経験でZOOMなどによる遠隔授業についてはすべての教員が対応可能となった。感染症の第7波に備え、事前に時間割を提示できるようさらに検討を行う。 ・進路実現についても、生徒のあらゆる進路に対応すべく可能な限り多様な講座を設置し、人数調整なども行った上で教育課程を運用していく。またカリキュラムマネジメントの立場で授業改善を進め、生徒が興味・関心を維持しながら高い目標を目指し、取り組み続けられる授業を行う。

□進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10 生徒 6 保護者Ⅱ-1)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナの影響も踏まえて年次ごとに実情に即した指導計画を作成し、実施しようとした。しかしながら、2年次進路ガイダンスや大学訪問は感染防止の観点から実施できなかった。 ・医学部入試セミナー、医療講演会、大学（東京農工大、電気通信大、防衛大）説明会は例年通り対面で実施し、卒業生による進路フォーラムと年次による進路集会は対面とオンラインの両方で実施し、生徒の進路に対する意識を高めた。 ・模擬試験や夏期・土曜講習を積極的に実施し、多くの生徒の参加があった。その結果、生徒の学びの意欲に応え、学習への意識づけに寄与した。また、それぞれの申し込みもオンライン化するなど生徒の参加を後押しした。 ・年次集会や保護者会において、教員や予備校関係者から進路に関する動向や生徒の学力面の状況などの情報を提供した。
-------------------	---

<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒及び保護者アンケート（生徒 6、保護者Ⅱ-1）において3年次で進路に関する理解が高まったのは、年次職員と協力しながら各説明会や年次集会、保護者会などを通して年次に応じた具体的な指針を示したことによる成果である。 ・ 多くの教職員が指導を肯定的に評価しているのは、各教員が生徒個々の実態を見ながら学校全体として講習や模擬試験、面談などの進路指導に協力的に携わったことによる。（教職員 10）
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年次の生徒や3年次の保護者ともに否定的な評価がやや多くみられるのは、進路への関心が高まることで情報や指針がより多く求められていることの表れと読み取れる。（生徒 6、保護者Ⅱ-1） ・ 2年次進路ガイダンスや大学訪問の機会がコロナによって失われたことから、オンラインも含めた実施方法の検討が必要である。 ・ 1年次のキャリア教育関連の進路行事を実施するにあたり、適切な内容と時期を検討する必要がある。 ・ 学習指導要領の改訂に伴う入試科目の変更や追加（「情報」の入試科目への導入など）に関する情報を取得していくことが必要である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路の年間計画にあるように、年次進行に応じた進路指導のテーマ（1年次：夢のある進路希望、2年次：知的感動を伴う学習活動、3年次：自分の力で進路実現）を意識しながら、適切な指導や情報提供を行う。1年次ではS L I やサタデーサイエンスなどとの関連から学問分野への興味を進路につなげる。2年次ではS L II などの探究的な学習から自分の得意分野や関心の幅を広げ、各自の進路をより具体的に意識させる。3年次では自ら情報を収集しながら自分のこととして進路の実現に向けた活動をさせる。（生徒 6、保護者Ⅱ-1） ・ 2年次進路ガイダンスや大学訪問をできるだけ対面で行えるようにしながら、同じ行事の中で対面とオンラインの同時実施を進める。 ・ 1年次のキャリア教育関連の進路行事として、4月に校外で卒業生によるサイエンスでの学びを意識づける企画を行い、7月や11月には協働や各自の特質を知るような企画を行う。 ・ 14期生の大学入試から変更される共通テストに関する内容を中心に情報の収集を継続していく。

3 学校経営の状況

□組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 5, 13, 14, 15, 18、生徒 4, 5、保護者 3)

取組	<ul style="list-style-type: none">・学校教育目標の実現に向け、全教職員が共通理解を持ち意欲的に教育活動にあたるような組織運営に努めた。特に、校務分掌等での学校経営参画意識をもち、自ら協働する組織構築を行った。・中高一貫教育校としてだけでなくSSH校の取組としても、附属中学校からの長期的な視点で生徒の研究が行えるよう組織運営を行った。特にSG事務局が中心になって附属中学校からの研究が継続できるようサイエンスラボの運営を開始したり、中高合同の研修会を月1回持ったりして、「育てたい生徒像」の共有を日常的に行った。・生徒・保護者・市民からの厚い期待に応えられるよう、安心で安全かつ笑顔で生活できるような環境づくりに努めた。特に経験の浅い教員を中心に「メンターチーム」を組織して、自主的に授業研究や生徒指導、進路指導の研修等を行い、教師力の向上を目指したり協働して業務にあたりたりする気風の醸成を行った。
成果	<ul style="list-style-type: none">・学校教育目標の実現に向け、全教職員が協働し、意欲をもって業務に取り組んでいる職員が70%以上となっている。(P1教職員アンケート13・P2教職員アンケート15)・研究・研修体制については、中高の教職員が協働して互いの力量を高めることのできる体制が作られていると80%以上の教職員が答えている。(P2教職員アンケート18)年度当初に「観点別評価」や「本校の理念や学校目標」の共有などをおこなう中高合同の研修会を計画し、中高の教職員が協働して「育てたい子ども像」に向けて取り組む組織が構築されつつある。・生徒は、学校がいじめや差別を許さない環境づくりや、教員が親身になって教育相談を行う体制ができていると90%以上が答えている。(P3生徒アンケート4、P4生徒アンケート5)また同様の質問に80%以上の保護者が学級で良好な人間関係を築いていると答えており(P7保護者アンケート3)、生徒・保護者とも学校の組織運営に安心して学校生活を送っていることがわかる。

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員アンケートの経年変化を見ると令和2年度より「(職員組織)一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である。(P4・15)」、「(研究・研修)教職員が互いに研鑽し、力量を高めることのできるように、校内の研究・研修体制が整えられている。(P4・18)」の項目は評価があがっているが、「(職員会議等)会議は効率的に運営されており、教育活動や学校運営の計画等の共通理解が図られる場となっている。(P4・17)」の項目の評価が大きく減少している。会議・研修等への負担感は大きく、会議の時間・方法等を工夫していく必要がある。 ・ 本校の教育理念を全教職員が共有し、それに向けて意欲をもって取り組むことは本校の学校経営の根幹を支えるものである。全教職員が対話を通して「育てたい子ども像」の共有を図る機会を持つことが必要である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍による学校行事などの教育活動の変更のために増加する会議を精査するとともに、主任・主幹会を活用し事前調整に努め、会議の時間・方法等を工夫していく。サイボウズや Google classroom、Zoom を活用した会議・情報共有等や、「誰もが」「負担なく」「時間をかけることなく」「意見を共有できる」という視点で会議を精選していく。 ・ 職員研修ではテーマを明確にし、限られた時間の中で教職員にとって有意義な場となるよう改善を図っていく。 本校の教育課程の中心となっている「サイエンスリテラシーⅠ」「サイエンスリテラシーⅡ」については、「サイエンスリテラシー」を担当する職員だけに責任を負わせることなく、組織として内容・方法ともに充実させていく。「サイエンス教育推進員」の力を借り、マネジメントや各関係機関との連携を強化する。また、コロナ禍でできなかったこととできたことを明確化するとともに、コロナ禍で培ったオンラインやハイブリッドの授業形態を活用しさらに内容を深化させる。 ・ 配属された職員に対しては、SSH指定校としての理解を深める研修を行い、研究授業等を積極的に行い、授業力向上を図っていく。 ・ 月1回の研修を計画的かつ中高の組織を深化させるものとして設定し、中高の職員の対話を図ることで組織連携を図っていく。 ・ 附属中学校と高等学校の教職員が、協働して互いの力量を高めることのできる研究・研修体制を強化し、全職員で学校教育目標の実現に向け意欲をもって業務に取り組めるよう連携を図っていく。

□学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、保護者Ⅱ-5、生徒Ⅱ-5、地域 9)

取組	<ul style="list-style-type: none">・ホームページの各ページの確認と訂正・更新について、原稿内容を精査し、可能な限り多くの情報を定期的に更新するよう努めた。・S I N E（会員制ネットワーク）や Google Classroom を導入し、生徒・保護者・職員間の情報提供と共有を図った。・外部への情報公開事業（学校説明会）においては、新型コロナウイルス感染防止の対策として、事前予約制と座席指定制により実施した。
成果	<ul style="list-style-type: none">・令和3年度は文化祭の開催が中止となり、地域や外部へ向けて本校の特色ある活動を発信する機会が減少する中、『Science Frontier News』の内容を検討し、春夏号と秋冬号の2回を発行して情報発信の機会を増やすことができた。（地域アンケート 9）・S I N E や Google Classroom の導入によって校内の保護者・生徒への情報提供は情報端末によってスムーズに確認できるようになった。（生徒アンケートⅡ-5、保護者アンケートⅡ-5）
課題	<ul style="list-style-type: none">・今後は、コロナ禍におけるオンラインでの活動を生かしながら、社会情勢に対応した情報公開事業を行っていく必要がある。
改善策	<ul style="list-style-type: none">・コロナ禍では保護者等の方が来校する機会が大幅に減少してしまったため、HPを活用した情報発信を定期的に行う。・スピーディーな情報発信を心がけ、サイエンスに特化した特色ある教育活動をさらに広く周知していくために、積極的に情報公開していく。・ホームページは多くの方の目に触れるものである性格上、保護者・生徒への連絡手段とはなりえないことを継続的に伝え、保護者・生徒への連絡手段については、昨年度と同様に、S I N E や Google Classroom を活用する。・保護者等に対しては、保護者会等の開催にあわせて、配布物の配布状況を伝えるとともに、学校生活の様子を共有していただきたい旨を理解していただく。

4 いじめへの対応に関する項目

□いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28 生徒 I-4、5)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員に本校の「いじめ防止基本方針」を周知し、いじめに対して学校として組織的に対応することを共通理解する。 ・年2回の生徒向けアンケートを教職員で点検・情報共有し、迅速な対応に努める。 ・情報収集・共有を迅速に行う。指導方針はいじめ防止対策委員会で決定し、組織的な対応を行う。 ・事案に対して継続的な支援体制をつくる。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員にいじめに対する組織的な対応を周知したことにより、教職員一人ひとりが高い意識をもっていじめ問題に取り組むことができた。このことが未然防止につながったと思われる。 ・生徒アンケートI-4「先生は生徒の不安や悩み事について親身になって相談にのっている」という項目について前年度より肯定的な回答が大幅に増加している。今年度は、分散登校など登校が制限される中、担当教員がオンラインでホームルームや授業を行った。オンライン授業等の導入により、生徒は自宅にいても担当教員とのコミュニケーションを図ることができるようになった成果であると思われる。 ・生徒へのアンケートをきめ細かく点検・共有することで、教職員の生徒理解につながった。 ・特別支援の校内組織との協力により、個に応じた支援や指導を行うことができた。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの未然防止の観点を盛り込んだ人権教育の推進をさまざまな場面で複数回行うことが必要である。 ・生徒への聞き取りの仕方など、より一層の生徒理解（傾聴）に向けた研修が必要である。 ・特別支援教育の知見を生かしたより一層の協力体制の維持と他機関との継続的な連携が必要である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年度初めはもとより、職員研修や会議の場面でいじめ防止基本方針を全教職員で共有し、必要な情報を発信していく。 ・前年度より特別支援教育コーディネーターを各年次に配置することができた。この体制を継続するために、今後もコーディネーターの人員を増やしていく。 ・情報の収集及び共有を正確かつ迅速に行う。 ・学校のみでの解決は難しい案件については、事案ごとに外部機関との連携を図り、その際の窓口などを組織的に対応できる環境を整える。